

京都府沖合海域におけるアカガレイの 主産卵期・成熟体長(要約)*

内 野 憲

(京都府立海洋センター)

日本海中部海域のアカガレイ *Hippoglossoides dubius* (SCHMIDT) はズワイガニ *Chionoecetes opilio* につぐ底曳網漁業の重要対象種であるが、産卵群が主に漁獲対象になっていたこともあって近年漁獲量が減少し、資源管理が早急に必要とされている種である。魚類資源の管理を実施する場合、産卵時期や産卵場所などの産卵生態についての知見は重要な検討項目であるが、本種の産卵生態についての知見は多くない。

今回、産卵の状況を具体的に調べるのに有効な生殖腺の熟度調査を、調査間隔をより細かいスケールにして実施し、本種の京都府沖合域における主産卵期と成熟体長について検討した。

なお、本報告については、京都府立海洋センター研究報告第18号(1995年)に「京都府沖合海域のアカガレイの生態に関する研究-II 主産卵期・成熟体長」の表題で投稿したので、ここではその要約を述べる。

要 約

1995年2月9日～1995年5月10日の間に、京都府沖合の水深150～320m域で操業された底曳網に入網した雌1,079個体、雄994個体の生殖腺の熟度を肉眼観察法で調査した。

熟個体と放卵ないし放精個体の出現ピークの間を主産卵期間と考え、京都府沖合海域におけるアカガレイの主産卵期は3月上旬から中旬の期間であると推定した。

雌では、半熟・熟・放卵個体の占める割合が50%以上となる体長を、雄では、熟・放精個体の占める割合が50%以上となる体長を平均成熟体長とし、雌では体長27cm以上のものが、雄では体長17cm以上のものが成熟群であると考えた。

*平成7年度日本海区底魚資源研究連絡会議では、「京都府沖合域におけるアカガレイの産卵水深について」と題して、主産卵期や主産卵水深及び産卵期の深淺移動などについて報告したが、他刊行物への投稿の関係から、表題を変更した。